

<b>Title</b>	神に迫られた改革：日本を神学する（東日本大震災国際神学シンポジウム）
<b>Author(s)</b>	大木，英夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要，-No.54, 2013.2：128-137
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4716">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4716</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 神に迫られた改革——日本を神学する

大木 英夫

### 1. 行く先不明の出エジプト

一年前の三・一一の東京の夜は、至る所交通渋滞、また都心から脱出（exodus）の行列が一晩中路上に溢れていた。そこには、出エジプト記の「火の柱」も「雲の柱」もなかった。「日本はどうなるか、人間はどこへ行くのか」という問いがのたうつような行列光景であった。

しかし、こんな大地震は東京では二度目であった、今から八九年も昔一九二三年九月一日の関東大震災、そのときの東京の惨状は、原爆下のヒロシマ・ナガサキに勝るほどの大崩壊であった。死者行方不明合わせて一〇万五〇〇〇、被災者総数一九〇万という記録を残した。この関東大震災の直前までの日本は、日清・日露の戦争に勝利し、第一次世界大戦は英仏米連合国側で戦い、繁栄の大正リベラリズム時代を享楽してきた。しかし、新興日本を支えてきた日英同盟は廃止（一九二二）、一九二三（大正一二）年八月一七日に失効、そしてそのわずか一五日後、関東大震災は東京を惨憺たる情景と化した。——金子みすゞの詩が残っている。「去年のけふは今ごろは、／私は積木をしました。／積木の城はがらがらと、／見るまに崩れて散りました。／去年のけふの、夕方は、／芝生のうへに居りました。／黒い火事

雲こはいけど、／母さんお腫めがありました。／去年のけふが暮れてから、／せんのお家は焼けました。／あの日届いた洋服も、／積木の城も焼けました。／去年のけふの夜更けて、／火の色映る雲の間に、／しろい月かげ見たときも、／母さん抱いてて呉れました。／お衣べもみんなあたらしい、／お家もとうに建つたけど、あの日の母さんかへらない。／今年はさびしくなりました。」——この女性詩人はやがて自殺した。——この東京潰滅から十年後の一九三三年、当時常任理事国の日本は国際連盟脱退、その同年台頭したヒトラーのドイツと結託、枢軸同盟を結び、そしてあの惨憺たる一九四五年八月一日へと行く運命の舵を切って行つた。

この度の東日本大震災は、すぐ広く世界中へ報道された。災害の巨大さの中、閃くような二つの言葉であつた。ひとつは南三陸町役場の女性職員遠藤未希さんという若い女性が、職場を離れずマイクを手放すことなく避難を呼び続け、そして彼女は巨大なツナミにさらわれて行つた殉職のこと、もう一つは或る有名な仏教学者が、大震災の残した惨状を「賽の河原」という仏教的言葉で言い現したことであつた。どちらも死の問題である。仏教的人生観は「生老病死」、しかし「賽の河原」から向こう岸へ渡れない。ニーチェの永劫回帰も同様であろう。しかし、遠藤未希の「未希」は「未来の希望」、「希望」（信仰・希望・愛）、この人のキリスト教との関係の有無はともかく、キリスト教的言葉である。

遠藤未希さんの死とは何か。旧約のエゼキエル書は、神が、エゼキエルにこう問うたと書いてある。「人の子よ、これらの骨は、生き返ることができぬのか」。預言者エゼキエルは神の前（coram Deo）に出で立つ。「出で立つ」（exsistere）とは、語義的にはハイデガーの言う「自己自身の外に立つこと（sich vorweg sein）」である。未希さんの死をエゼキエル書が説明する。未希さんの「死」は「生老病死」のような行き止まりではない。エゼキエルは、それを神に問うた。それは未希さんの「未来の希望」に関わる答えである。エゼキエルに神は、「それゆえ彼らに預言して言え。主なる神はこう言われる、わが民よ、見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓からとりあげて、イスラエルの地にはいらせる。わが民よ、わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓からとりあげる時、あなたが

たは、わたしが主であることを悟る」(三七・一二―一三、口語訳、以下同様)。――遠藤未希さんの死は、永遠の命をもっている。死滅か、「賽の河原」か、そうではなく永遠の命か。そのことが決着され覚悟される時に、この日本の深く内面からの転回が始まるのではないか。

## 2. 関東(東京)大震災(一九二三・九・一)後から第二次大戦後までの日本の神学問題

日本のプロテスタントはアメリカ・プロテスタント諸教派の伝道によって成立した。それを代表するのは、内村鑑三であると言つてよい。彼の信仰思想は、その墓銘碑によく現れ出ている。『For Japan, Japan for the World, The World for Christ, And All for God.』

日本プロテスタンティズムの問題は、関東(東京)大震災後間もなく内村はじめ明治初期のプロテスタント指導者たちが世を去つた後、そして日本の軍国主義化への大きな転換を始めたことによつて露わとなつた。ちょうど関東大震災の頃、ヨーロッパでは第一次大戦後、神学者カール・バルトが台頭した。知的な日本プロテスタント牧師・信徒はバルト神学に傾倒した。一九三三年、ヒトラー台頭後、日本のプロテスタントに奇妙な現象が起こつた。まさにその一九三三年、バルトは『今日の神学的実存』をもつて、ヒトラーと結びつく「ドイツ的キリスト者」と対立した。ところが、奇妙な現象が現れた。「何事もなかったかのごとく」というバルトの言葉を用いて、日曜日の教会はいわば精神のカタコンベの中で垂直次元の礼拝を守る、そして週日には軍国主義日本の中で国策に従わざるを得ない。このような二面性は、バルト神学的「超越」の悪用なしにはできないことであつた。大洋の島国日本からの亡命は不可能であつた。軍国主義的国策への順応となつた。やがてアメリカのミッシェンとの関係は断ち切れ、諸教派は一九四一年「日

本基督教団」へと合併統合された。

日本のバルティアンは、戦中・戦後「何事もなかったかの如く」を合言葉にバルト神学に執着し、その傾倒は敗戦後も引き続く。むしろ敗戦後バルト神学への傾倒はさらに深まり、日本ではあの巨大なバルトの『教会教義学』全巻の翻訳さえ果たされた。<sup>(3)</sup>

第二次大戦後の二年目にアムステルダムで開催された世界教会会議は、「世界の無秩序と神の計画」という主題で行われた。バルトはこの題に真つ向から反論、「まず神の国と神の義を求めよ」との聖句により、題名の上下逆転を要求した。そこにバルト的垂直次元が戦後も明確に見えた。ニーバーは、それに対して「われわれは人であつて神ではない」という再逆転をもつて反論した。水平次元と歴史次元を意味する。<sup>(4)</sup>その後『クリスチャン・センチュリ』誌上でのバルトとニーバーの論争となつた。<sup>(5)</sup>ニーバーはその論争後 *Faith and History* を出版（一九四九）、「歴史」の水平次元に目を向けた。ニーバーのバルト批判は、垂直次元から水平次元への神学的転向の出発点となるべき対決であつた。ヨーロッパではボンヘッファーは戦時中、戦後はモルトマンが、バルトとは違う方向を示した。

戦後は既に日本基督教団から戦前の旧教派に戻つてアメリカの母教派との関係を取り戻す動きがあり、残存した日本基督教団は、遅れ馳せの一九六七年「戦争責任告白」を日本基督教団議長個人名で出した。それは当時の教団の指導的牧師・信徒の間には東西対立におけるバルトの東への傾きの影響を受け、ロマドカ指導のプラーハ平和会議との連携をもつて、一種の左傾反米をひき起こした。バルトは、ソ連軍プラーハ侵攻の報を聞きながら死んだ。

### 3. この東日本大震災に至る日本の神学状況——グローバリゼーションと終末論

東日本大震災の状況を旧来のバルト的垂直次元の発想では捉えることはできない。巨大なツナミは、原発をはじめ近代文明の垂直次元を押し倒し、押し流した。「地の基ふるい動く」、垂直次元の文明（バベルの塔を思い出す）をすべて押し倒す激震が、何と呼び覚ましたか。グローブが——自転公転ではない——「転開」してグロ、バラ、イズする、「グローバリゼーション」という過去二十年の間に発生した新しい言葉、地球の未来志向的「転開」が、いたるところ現代世界を押し流し流しだした。現代知性はそれをどう捉えるか。この現状を神学的に捉え直すことは、まず神学自体の改革がなければならぬのではないか。

或る年わたしは、或る出版社から『バルト』という書の著作を依頼された。バルトの書齋にはコルマールの美術館にあるグリューネヴァルトの有名な十字架像の小型のものが飾ってあった。わたしはしかし、バーゼルの美術館でホルバインの『墓に横たわるキリスト』を見たとき庄倒された<sup>(6)</sup>。その時から、バルトの垂直次元の神学とは異なる、「水平次元」の神学的開示を受けたような思いであった。

以前からわたしは、レーヴィットが「世界史」という概念は、本来救済史（Heilsgeschichte）に由来するものだと言ったことに啓発されていた<sup>(7)</sup>。仏教的人生観は「生老病死」、その世界観はニーチェ的永劫回帰から超脱できない。しかし、ホルバインの描く「土曜日のキリスト」は、未来への直線方向へ横たわり、そして救済に不可欠な「古い人から新しい人へ」の「転回／移行」を導く！

カントの後、ヘーゲルは「有（Sein）—無（Nichts）—成（Werden）」という弁証法的論理を発見した。しかし、「土曜

日のキリスト」に体现された論理は、それとも違う、それは「無 (Nichts) — 成 (Werden) — 有 (Sein)」、死を越えて復活と永遠の生命へと成り動く。本来の人間存在／有 (Sein) とは、洗礼における「死んで生きる」の「新しい存在」への動き、「成 (Werden)」として体験されるのではないか。人間実存の内面／外面に動くバニヤンの「前進」(Pilgrim's Progress)<sup>(6)</sup>への動き、その前進の究極は、この土曜日のキリストによつて復活へと新生の動きである。もしそこにキリストが横たわつて居なければ、死はあの自殺者イスカリオテのユダのアケルダマへの墜落となるであろう。パウロはなぜ「わが生くるはキリスト、死もまたわが益」と言うか。キリストに在つて死↓生、新生へ転向があるからではないか。洗礼も聖餐も、そのようにしてサクラメンタルなのである。向こう岸、復活の日曜日へと渡るこの「土曜日のキリスト」の横倒しの人柱の「無—成—有」の動きに運ばれて、救済の動きを体験・実感するのである。パウロの文書は、それを体験し実感をもつて書かれた。<sup>(10)</sup>——この「土曜日のキリスト」、横倒しの人柱は、世界史の中に横たわる救済史の次元を開示する。枯れ骨の谷を「見よ！」と言われた。しかし、この預言者は死者の中に自分をも見た。

なぜキリストは陰府の深みに橋のように横たわり、そしてあたかも「渡れ！」と励ますように目を開き口をあけているのだろうか。<sup>(11)</sup>あの十字架から復活へのただ一日だけなのか。そうではない。「主にあつては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」(Ⅱペテロ三・八)。あの土曜日の一日、それは千年でもあり、いや、世の終わりまでも、動き続けているのではないか、——(悪い譬えかもしれないが)あたかも電動エスカレーターのように！——このキリストによつて救済史 (Heilsgeschichte) の「方向と線」が決定されている！第一次・第二次大戦から始まった「転回／転開」とは何か、それは、永劫回帰的回転の地球儀的グローブが、直線的未來方向へ「転開」(つまりグローバリゼーションの動き)へと直線コースに入つたこと感覚であり、その方向と線は、レーヴィットが言う聖書的な創世記から黙示録に至る救済史的直線なのではないか。それは終末論的未來へ向かう。バルト的垂直次元の現在終末論から、今やニーバーの水平次元に関わる歴史社会的神学へと新しい関わり、あるいは新しい関係づけをもたねばなら

くなっているのではないか。

#### 4. 新しい未来へのエクソダス

東京下町に世界一高いというスカイツリー・タワーが完成する。日本古代五重塔の「心柱」工法を近代的に生かして用いた成果である。ところで、敗戦の年一九四五年三月一〇日その地はまさに「賽の河原」であつたのだ。<sup>(12)</sup>この大震災後の日本の再構築には、タテの心柱ではない、そうではなく、ヨコの心柱が必要ではないか。あのホルバインの「土曜日のキリスト」は、金曜日から日曜日の間の土曜日の深い淵の中に横たわる。キリストは、救済論 (Soteriology) ではなく、救済史 (Heilsgeschichte) の本質を開示する。——仏教の「生老病死」、哲学者ニーチェの「神の死」の哲学の閉塞的円環を打ち開いて、世界をそして人間を直線化する。未来志向・新形成へと導く。人間の存在 (Sein) とは無↓成↓有、「新しい存在」(ティリッヒの言う“New Being”)とどうよりは、むしろ「実存」(“Existenz”外へ出て立つ)、それがキリスト教的実存ではないか。ボンヘッファーの言う“Nachfolge”、キリストに従う、未来へ向かつて動き出す、現状に諦念せず停滞せず、出立 (exodus) するのである。バニヤンの「ヒルグリムズ・プログレス!」、パウロは言う、「いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。……それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである」(Ⅱコリ四・一〇以下)。「土曜日のキリスト」という橋上でわれわれはその言葉を獲得するのである。ボンヘッファーが「キリスト教の深い此岸性<sup>(13)</sup>」と言ったのは、この深い淵の中に横たわる「土曜日のキリスト」によつて十字架から復活へと渡る体験を言っているのではないか。そこには「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自



分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得になるうか（マルコ八・三四以下）というキリストの言葉は、ボンヘッファーの“Nachfolge”を導く。その聖土曜日のキリストが、現代の「火の柱・雲の柱」、世界史の中を貫く心柱・救済史である。

プロテスタンティズムの「出立」とは何か。バニヤンの同時代人ミルトンは、「宗教改革を改革する」(reforming of Reformation itself)ことを言った。それはヨーロッパ大陸では、ウエストファリア条約で地理的（空間的）区分をもつて宗教改革後の諸派分裂を治める同時期であった。こうしてプロテスタンティズムは空間的に定着し、バニヤンの前進を失ったのではないか。「イエスはなお先に進み行かれる」（ルカ二四・二八）、われわれは遅れているのではないか。今われわれに求められているのは「出立」ではないか。グローバリズして終末論的未来へと転向して行く。その中でプロテスタント・キリスト教は「たえず改革されて行く教会」“Ecclesia semper reformanda”で前進せねばならないはずである。そしてその現代のグローバリゼーション動向の道先案内をせねばならないのではないか。わたしは、この大震災は、戦後日本のプロテスタント諸派をその根底から揺さぶる「神の改革の迫り」を感じてやまないのである。わたしは、ここで「日本の神学」は日本的神学ではない、日本を、神学することだという題を出した。ミルトンは『アレオパギティカ』（二六四四）で、古代エジプトのオシリス神話を引いてこんなことを書いた。反乱によって死体はバラバラに吹き飛ばされた王の遺体の断片を妃イシスは「野を越え山を越え探した」、そして「真理の主の再臨までは全部見つけられないだろうが」と注釈した。——今や、大震災に揺さぶられて、われわれはなにか巨大な課題を神から与えられたのではないかと思う。そのような苦悩の中の日本に、太平洋を越えてここに来てくださったアメリカのかたがたに、日本に古くから伝わった中国の孔子の言葉「朋あり遠方より来る、亦樂しからずや」をもって、心から感謝と歓迎の意を表したい。

## 注

- (1) 金子みすゞ『去年のけふ——大震記念日に——』『空のかあさま』、新装版金子みすゞ全集・Ⅱ、JULIA出版局、一九八四年、二六—二七頁。
- (2) 一九二六年日本は大正から昭和へ、そして一九三一年満州国成立、大陸進出に活路を求め、その後リットン調査団の報告が国際連盟に提出、日本は孤立、当時連盟常任理事国であった日本の代表松岡洋右（アメリカ育ちのキリスト者）は、「かつて『狂ヘル輿論』がキリストを十字架にかけたように、現在の輿論も日本を十字架にかけようとしているが、誤った輿論は数年のうちに必ず変化するであろう」と述べ壇上から下りた。——その問題を巡って、アメリカでは、ラインホルド・ニーバーと弟リチャード・ニーバーとの論争があった。リチャードは日本の満州国問題に関して、「何もしない不干渉の美德」を主張し、兄ラインホルドはそれに反対した。
- (3) バルトの『教会教義学』の全訳は英仏訳と並んで日本は世界で三番目である。しかしこのような事態に至るのは、日本の明治憲法制定以来の（わたしがルターの『教会のバビロン捕囚』をもじって言う）『ゲルマン捕囚』の結果であった。
- (4) Carl Michelson, *The Hinge of History* (1959) は実存と歴史の関わりに視線を向けたもので、当時の論題に触れている。
- (5) バルトの垂直次元が歴史的現実と接する接点に方向性を与える試みは、バルト自身戦後のたとえば『キリスト者共同体と市民共同体』（一九三八／一九四六、二九節参照）になってようやく言及されたが、第二次大戦後のスターリン讃美、イギリス・アメリカのデモクラシーとフランスのデモクラシーの区別がつかないなど、バルト神学の思わぬ問題性を露呈した。バルトには、リンゼイが指摘した東と西のデモクラシーの違いの識別ができなかった。Cf. Woodhouse, *Puritanism and Liberty*, Postscript to the 1950 edition.
- (6) ホルバインが描く「土曜日のキリスト」とは、黄泉の深い淵に架けられた橋、横の「人柱」ではないか。これを見たドストエーフスキイが『白痴』に書き記したことで知られる、ただわたしはドストエーフスキイとは別様に見た。

- (7) Cf. Karl Loewit, *Weltgeschichte und Heilsgeschichte*——レーヴィット自身はしかしニーチェに回帰した。
- (8) 「新しい存在」というティリッヒの概念は、われわれはティリッヒのように存在論的にではなく「歴史」的に見る。
- (9) Cf. John Bunyan, *Pilgrim's Progress*.
- (10) ここで仏教的「生老病死」的人生観、また東日本大震災の惨状を見て「賽の河原」と言ったことに対して、使徒パウロは、それとは異質のキリスト教死生観を提示する。このパウロの言葉は、パウロの神学的実存を言い表していることと見做されるべきである。それはキリストにおいて「生」の真実が違って現れ出る。
- (11) のちに同じ黄泉に横たわる絵を書いたが、そのキリストは目を閉じている。
- (12) 今から六七年前、あの敗戦の年、一九四五年三月一〇日、今日スカイツリーという世界一高いと誇る塔が完成間近の下町業平橋界限、その地域は、大空襲によってまさに惨憺たる焦熱地獄と化したところであった。
- (13) モルトマン、喜田川信、蓮見和男訳『神学の展望』新教出版社、一九七一年、五七頁。